

血を見るのも苦手だった私が、
まさか発生学の道に進むとは。
マウスの胎児を使って研究するなんて、想像もしていませんでした。
自分自身が一番びっくりしています。
こんなにも夢中になれた、
発生学との出会いに感謝ですね。



「発生研」での日々は
新たな発見の連続

私が、履修ミスに気付いても途中で辞めなかったのは「こんな世界があったのか!」と、発生学の面白さを知ったからでした。

卒業研究を前にしたとき、薬学部の卒論指導研究室の中に「発生研」があると知り、迷わず生殖発生分野へ。この分野を選んだのは、ここの山田源教授こそ、私が間違えて履修した講義を担当していた教授だったからです。

研究室に入って、まずは実験に必要な手技など基礎的なことを学びました。やはり薬学部とは勝手が違うところも多く、まさに弟子入り状態。レンズ越しに動くマウスの胎児を見ていると、車酔いのようにになってしまう“顕微鏡酔い”も経験しました。それもなんとか克服し、基礎的なことがひと通りできるようになって、研究テーマを与えられたのが5年生のはじめのころ。個体発生についての研究では、新しい発見があるたびに研究が面白くなり、卒論を仕上げるまでに、あんなデータがほしい、こんなデータがほしいとどんどん研究にはまっていきました。研究に熱中できた2年間は、本当に充実していました。

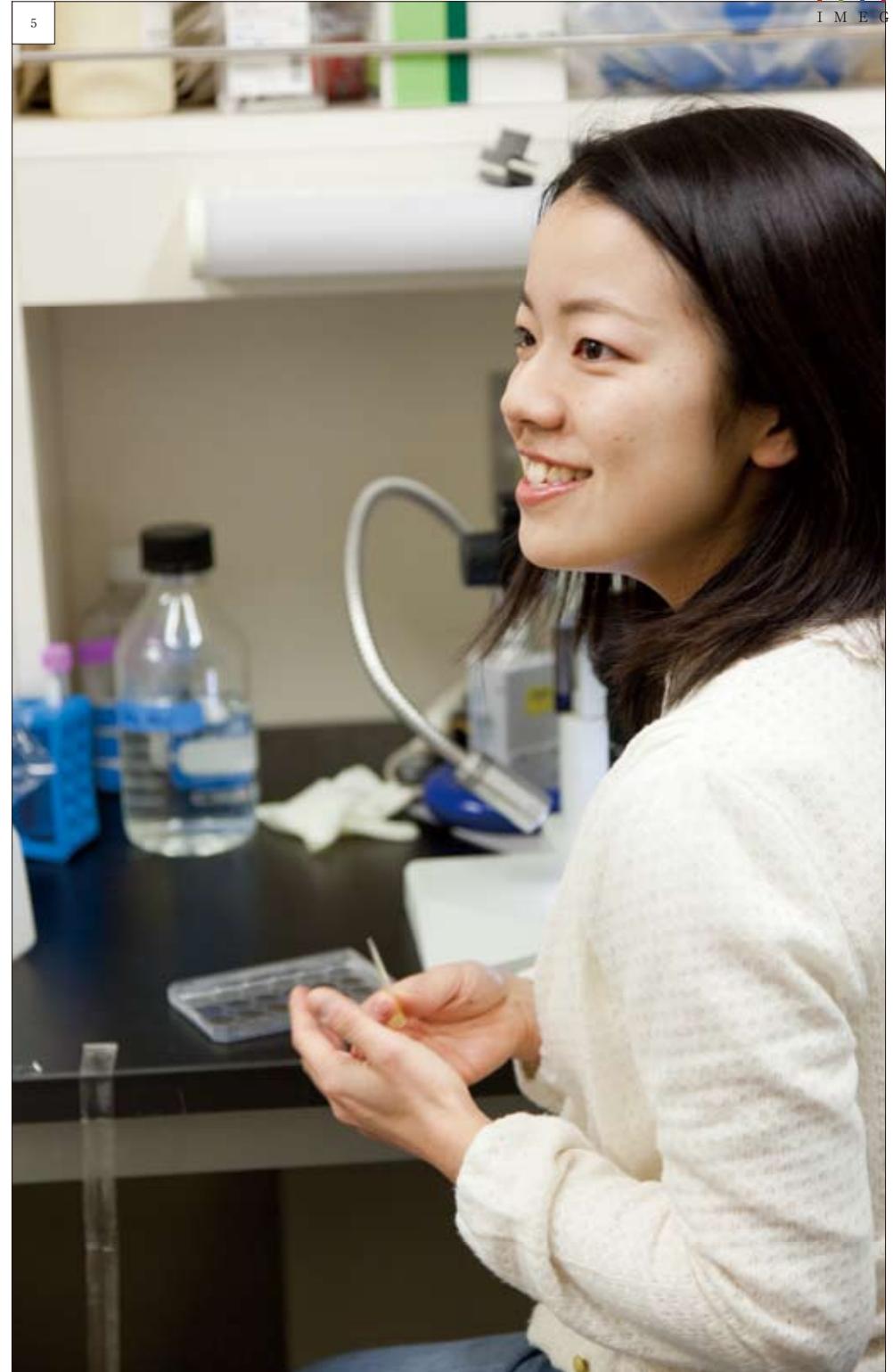
この春からは医療機器メーカーへの就職が決まっています。「発生研」で知った“発生学”の世界をこれからも楽しみたいですね。

安達 泰葉

熊本大学薬学部から臓器形成の不思議さに惹かれて発生学の研究室へ。「発生研」では学生会に所属し、研究室横断的な学生活動に関わった。2012年春より医療機器メーカーに勤務。



- 1 これはマウスの骨に色を付けたサンプル。軟骨と硬骨を色分けすることで分かりやすくしているんです
- 2 昔は、こういうものを見るのも苦手でした(笑)
- 3 この中にはマウスの胎児が入っています。とっても小さいんですよ
- 4 顕微鏡を使って、マウスの胎児を観察します。小さなマウスが液体の中でゆらゆら動くんです。初めは、酔い止めを飲みながらのぞいていました
- 5 お世話になったラボとももうすぐお別れ。思い出がたくさん残っています



発生研の人々

People of Institute of Molecular Embryology and Genetics



夢の再生医療の 実現に向けて

中学生のころに読んだ本の中で、「再生医療とは自分の細胞で組織をつくり、体内に戻すという治療法である…しかし、実現は困難である」といった内容が記されており、これをきっかけに「実現したい!」と思うようになりました。大学に入学し、軟骨の再生を学んでいたころ、妹が難病を患いました。その際、患者が少ない故に病因が分からず、治療法もないという現状に衝撃と絶望を覚えたと同時に「この疾患を治したい!」という気持ちが芽生えました。そんなときに特定疾患由来のiPS細胞を用いて病態解析を行っている幹細胞誘導分野を知り、進学を決めました。

現在は、iPS細胞の分化誘導方法について研究を行っています。まだうまくいかないことも多々ありますが、難病を治すという夢を追って、やりがいを感じながら充実した毎日を過ごしています。

幹細胞部門 幹細胞誘導分野 修士課程1年
崇城大学 生物生命学部 応用生命科学科出身

金子 裕美



幼い頃の興味から 「発生研」へ

飼っていたニワトリの産んだ卵が孵化したとき、「卵からどのようにしてヒヨコができたのだろう」と疑問を感じたのが私の発生学に興味を持ったきっかけでした。この体験に端を発し、大学は、生物学を学べる学部に進学しました。学部で学ぶ中で「発生」をより深く学びたい、自分で探求したいという欲求が強くなり大学院進学を決めました。さまざまな大学院を調べる中で「発生研」に出会い、見学会で訪れた際に西中村教授に話を伺い、研究が楽しそうであったため進学を決めました。

「発生研」では研究室の研究だけではなく、グローバルCOEのセミナーなど外部の研究者を招いた講演会などがあり、所属分野以外の知識や研究結果に触れる機会もたくさんあります。知識とアイデアにあふれた環境で学び、また充実した設備で研究が行えて日々楽しく過ごしています。

器官構築部門 腎臓発生分野 修士課程1年
鹿児島大学 理学部 生命化学科出身

賀来 祐介

OG



「発生研」で学んだこと

「発生研」には博士課程修了後、田賀哲也先生(現東京医科歯科大学難治疾患研究所)が教授をされていた転写制御分野にポスドクとして就職しました。当時はポスドクや院生がたくさんいて、アドバイスをもらったり、気軽にディスカッションができる環境がありました。よく考えて黙々と研究している人たちがばかりで、実験の進め方や考え方など勉強させられることが多かったのです。

また、さまざまな分野の先生方が来られる「発生研」のセミナーは、とても刺激になりました。ここで学んだ多くの知識は、視機能病態学分野で新たな実験を立ち上げるときに大変役に立ちました。「発生研」が中核組織として推進したグローバルCOEのリサーチ・アソシエイトになったおかげで、最新鋭の機器や設備を使う機会にも恵まれました。この環境を十分に活用できていたら多くの結果を残せたのでは、と今は後悔ばかりしています。

熊本大学大学院 生命科学研究所 視機能病態学分野
前所属 熊本大学発生医学研究所 転写制御分野

井上(餅田) みゆき

OB



「発生研」で身に付けた 忍耐力

私は、現在ペット関係のメーカーで働いております。仕事の内容は、大学院のときに経験したことはまったく異なりますが、共通点もあります。

「発生研」での2年間は私にとって大きな財産となりました。私が所属していた損傷修復分野では、主にマウスの細胞を用いて遺伝子とがんの関係を研究しておりました。特定の遺伝子を欠損させ、抗がん剤、紫外線に対する感受性を調べました。がん細胞の性質にどのような影響が表れるのか研究し、とても時間、労力と忍耐力を要したことを覚えています。しかし、一つの結果にたどりつくときまでの苦労を忘れるくらい充実感と達成感に満ちあふれます。

どんな仕事も時間、労力、忍耐力を要しますが、なかなか努力に対して結果がついてこないこともあります。それでも、努力に対して結果はついてくると「発生研」で学び、現在充実した日々を過ごしています。

株式会社 ドギーマンハヤシ 勤務
熊本大学大学院 医学教育部 修士課程修了

仲波 昂介